

●台湾アリタケ (*Ophiocordyceps unilateralis*)

台湾アリタケに感染したチクシトゲアリは、湿度の高い場所に生えている植物の葉裏の主脈に噛みついて体を固定し、その状態で絶命します。その後、チクシトゲアリを栄養分として、体内に台湾アリタケの菌糸が成長し菌核を形成します。湿度や温度などの条件が整うと子実体(いわゆる“キノコ”)を形成し、周辺に胞子を散布します。

●ハナサナギタケ (*Isaria japonica*)

ハナサナギタケは、蛾の蛹や幼虫に感染し、地中の繭から子実体を発生します。薬効成分が多いため、蚕に胞子を感染させて子実体を形成させる人工培養も行われています。上写真の個体は、蛾の蛹にハナサナギタケが感染して子実体を伸ばしたものです。

●クチキムシツブタケ (*Perennicordyceps cuboidea*)

クチキムシツブタケは朽ち木の内部に潜む甲虫類の幼虫を宿主とする冬虫夏草の仲間です。上写真の個体は、キマワリの幼虫に感染したクチキムシツブタケをノミとピンセットを使って掘り出したものです。

●ニホンマムシ(*Gloydius blomhoffii*)

菌類や粘菌類の調査の際には、スズメバチやマムシ、イノシシといった危険な生き物に遭遇する事があります。上写真のニホンマムシは豊田市の里山で台湾アリタケを探している際に、すぐ目の前にいるのを運良く発見し、撮影したものです。攻撃態勢に入っています。